

李庚の絵画

——中国の現代作家紹介——

塩田昌弘

The Art of Li Geng's Painting

SHIOTA Masahiro

[目次]

序章

I. 作家略史

II. グスタフ・マーラーについて

III. 李庚制作《マーラー「大地の歌」》について

終章

図版

注と参考文献

序章

中国の近代から現代にかけての著名画家といえば、呉昌碩 (Wu Changshi, 1844~1927)、齊白石 (Qi Baishi, 1864~1957)、張大千 (Zhang Daqian, 1899~1983)、傅抱石 (Fu Baoshi, 1904~1965)、黄胄 (Huang Zhou, 1925~1997)、徐悲鴻 (Xu Beihong, 1895~1953)、劉海粟 (Liu Haisu, 1896~1994)、李可染 (Li Keran, 1907~1989)、呉作人 (Wu Zuoren, 1908~1997)、林風眠 (Lin Fengmian, 1900~1991) 等を挙げることができる。さらに、それに続く気鋭の画家たちとして、現在、李庚 (Li Geng, 1950~)、陳允陸 (Chen Yunlu, 1959~)、李曉剛 (Li Xiaogang, 1958~) 等の存在が光っている。

本論では、現在日本に留学し、水墨画を研究している李庚をとりあげ、その作家活動の中で特に、2000年、北京の中国美術館で開催された『大地之歌』(视觉与音响交错的空间)

1.)
展の趣旨及び作品について論考したい。

2.) I. 作家略史

下記の事項は、李庚の画歴を中心としてまとめたもので、李庚は現在、京都造形芸術大学教授として水墨画と日本画を研鑽している俊英画家である。現代中国絵画史を彩る画家として活躍中である。

- 1950年 2月17日(旧暦庚寅年1月1日)北京に生まれる。名付け親は齊白石(Qi Baishi、1864~1957)
- 1957年 中国の代表としてインドでの世界子どもコンクールに入選、銀賞受賞。
- 1958年 イギリスでの世界子供絵画コンクールに入選、大賞受賞。“写意重彩”期。
- 1959年 中国全国子供絵画コンクールに入選、第一席を受賞。中国雑誌「人民中国(英文版)」の表紙に「女起解」を發表。中国映画「神童画家」に出演する。
- 1961年 宋元絵画の模写をはじめめる。
- 1964年 ポーランドにおける世界青年友好芸術祭に入選、受賞。
- 1972年 “文人画主義”を提唱。『草堂荷風』を制作。
- 1974年 “潑墨主義”を提唱。
- 1978年 『瀑布』を《広州文芸》に發表。“新東方写実描写主義”作品を發表。
- 1980年 来日。アメリカ、イギリス、香港、シンガポール、マレーシアの「現代中国芸術」展に出品。
- 1981年 サザビーズのオークションで、『夜泊』、『雪原』が買上げられる。
- 1982年 日本画『かわせみ』が香港の美術雑誌に掲載される。『蒙古の回想』、『大阪の夜』を發表。
- 1984年 東京・三越日本橋本店美術画廊で「中国画壇の英才 李庚水墨画」展を開催。“心境山水”創立。
アメリカのハーバート・F・ジョンソン美術館の「現代中国画」展に出品。
“元曲入画論”提唱。
- 1985年 インディアナポリス美術館、ミネソタ大学美術館で開かれた「現代中国美術」展に出品。“写意画復興”提唱。
- 1986年 大阪府立現代美術センター、名古屋丸善書店ギャラリーで「李庚西游記」展を開催。京都芸術短期大学の教鞭を執るかたわら、西ドイツのミュンスター工科大学の客員教授として招聘される。
- 1987年 西ドイツのウエストファーレン州立美術館で「東方水墨画の星・李庚の世界」展を開催。西ドイツのミュンスター工科大学で「東方芸術」(講座)を開講。

- 1988年 “新古典主義”を提唱。西ドイツのミュンスター工科大学で「東方芸術～線の造形～」講座を開講。西ドイツのニュルンベルグで「李庚の芸術」展開催。この頃から、日本の美術大学で水墨画の教育の必要性を考える。
- 1991年 大阪・高島屋百貨店美術画廊で「唐朝詩人と宋人詩意—李庚水墨画」展を開催。
- 1992年 「両洋の眼・現代の絵画1992」展に『淡墨山水～新古典主義～』を発表。“淡墨山水”提唱。
- 1993年 東京・日本橋美術画廊で「詩人と詩意 李庚水墨画」展を開催。
- 1995年 季刊雑誌『墨』24夏号に「水墨画入門」として李庚の水墨が紹介される。
- 1997年 氷上町立植野記念美術館で「日中国交正常化25周年記念 李庚展～日本風景の美・氷上を描く～」を開催。
- 2000年 中国美術館（国立）にて「李庚」展開催。「敦煌藏経洞発見100周年国際学術フォーラム」に参加。京都造形芸術大学歴史遺産学科教授となる。
- 2001年 西光寺で「来迎図」障壁画14面制作。清華大学（国立）の「科学と芸術国際学術フォーラム」に参加。
- 2002年 読売新聞朝刊小説「青山一髪」（陳舜臣作）の挿画担当（連載中）。
エンバ中国近代美術館で「李庚と陳允陸の絵画」展（日中国交正常化30周年記念）開催（芦屋市）。

II. グスタフ・マーラー (Gustav Mahler, 1860～1911) について

マーラーは、1860年7月7日、ボヘミアのカリシュトで、ユダヤ人の商人ベルハルト (Bernhard Mahler) とマリー (Marie Hermann) との間に生まれた。1875年、ウィーン音楽院に入学し、ピアノ、和声学、対位法、作曲法を学んだ。³⁾ 25才の時、プラハでモーツァルト (Wolfgang Amadeus Mozart, 1756～1791) 他のオペラ指揮者として成功をおさめた。1888年、第一交響曲を完成し、ブタペスト王立歌劇場の音楽監督に就任した。1897年には、ウィーン宮廷歌劇場の芸術監督に任命された。そして、42才の時、アルマ・シントラ (Alma Schindler) と結婚、翌年には、フランツ・ヨーゼフ皇帝から第三等鉄十字勲章を授賞した。1907年、メトロポリタン歌劇場の指揮者となり、1908年、48才の時、大作「大地の歌」を完成した。そして、1911年、ニューヨーク・フィルハーモニーで最後の指揮をとり、ヨーロッパに帰るが、5月18日、病のためウィーンで没した。以上がマーラーの略歴であるが、当時、ユダヤ人であったという事で、社会的に苦難をしいられ、それが作品に精神的な深さを与えるようになっていった。^{4.)}

「大地の歌」は、ベートゲの詩集（訳詞）『中国の笛』“Die chinesche Flöte: Nachdichtungen chinesischer Lyrik” 1922、Leipzig.^{6.)} から交響曲の想を練ったのである。そ

の訳詩の原詩は、中国の唐代の詩人、李白、王維などの有名な漢詩であり、大地と天空の間に生きている人間、その孤独な存在をテーマとしている。マーラーの音楽が総じて厭世的な調子をもつのは、このためであろうと考えられる⁵⁾。そして、東洋的、中国的な、自然と人間との或る種の精神的な交感の世界が曲に歌詩に自由に表現されているのを我々は知ることができるのである。漢詩と交響曲、即ち、詩と音楽の世界の美事な融合の展開がみられ、マーラーの「大地の歌」に対する芸術的な作曲の意欲が、それを聞く者に強く迫ってくるのである。

Ⅲ. 李庚制作《マーラー「大地の歌」》について

李庚は、2000年の3月28日から、4月2日まで、北京市に在る国立中国美術館で、これまでの絵画創作の活動の集大成といえる展覧会を開催した。タイトルは、马勒「大地之歌」～Gustav Mahler Das Lied Von der Erde～で、英文では、Li Geng Dedication to Mahler's "Song of the Earth" Ink and Wash Paintings と訳されている。即ち、オーストリアの作曲家、指揮者であるグスタフ・マーラー (Gustav Mahler, 1860～1911) の作曲した「大地の歌」(Das Lied von der Erde, Le Chant de la terre, 1908年作) を李庚が聴いて感得し、“靈感”とも言える感情の流れを、水墨や彩色抽象作品として描き発表した展覧会であった。「大地の歌」は6部から構成された作品で、それぞれの楽章の標題はそれぞれ次のとおりである。マーラーの交響曲の楽章は、ドイツ語で書かれていた。^{6.)}

第1楽章「大地の哀愁を歌う酒の歌」

第2楽章「秋に寂しきもの」

第3楽章「青春について」

第4楽章「美について」

第5楽章「春に酔えるもの」

第6楽章「告別」

これらの各楽章には中国唐代の詩人(李白、錢起、孟浩然、王維)の詩が下敷になっているのである。^{7.)}1907年、夏の終わり頃、マーラーは、友人のテオバルト・ポラーク(Theobald Pollak)から1冊の詩集を受け取った。それは、ドイツ語、フランス語、英語に訳された中国の古い詩の中から、ハンス・ベートゲが83編を選んでドイツ語で編集したものであった。^{8.)}

マーラーは、1908年の夏、ハンス・ベートゲ(Hans Bethge, 1876～1946)が翻訳した中国の詩『中国の笛』をテキストとして、オーケストラ用の歌曲の制作にとりかかった。従って、この歌曲の詩の精神、心は、唐代の詩人の心を歌っている、と考えられるのである。

次に、第1楽章から第6楽章までの出典となった原詩を、中国美術館発行の展覧会リーフレットを参考にして明記してみる。^{9.)}（左側に原詩、右側に読み下し文を掲載、読み下し文中の傍線部の詩意は下段に記した。）

第一楽章「大地的忧愁 饮酒歌」

李白「悲歌行」^{ひ か こう^{10.)}} 悲歌行

悲来乎、	悲來るか、
悲来乎、	悲來るか。
主人有酒且莫斟、	主人酒あるも、 <u>且らく斟む莫れ。</u>
听我一曲悲来吟。	我が一曲悲來 <u>吟を聽け。</u>
悲来不吟还不笑、	悲來って、吟せず、 <u>還た笑わず、</u>
天下无人知我心。	天下、人の我が心を知るなし。
君有数斗酒、	君に數斗の酒あり、
我有三尺琴。	我に三尺の琴あり。
琴鸣酒乐两相得、	琴は鳴り、酒は樂み、 <u>兩ながら相得たり。</u>
一杯不啻千钧金。	一杯 ^{ただ} 啻に千鈞の金のみならず。
悲来乎、	悲來るか、
悲来乎、	悲來るか。
天虽长地虽久、	天は長しと雖も、 <u>地は久しと雖も、</u>
金玉满堂应不守。	金玉滿堂、 <u>應に守らざるべし。</u>
富贵百年能几何、	富貴百年、 <u>能く幾何ぞ、</u>
死生一度人皆有。	死生一度、 <u>人皆有り。</u>
孤猿坐啼墙上月、	孤猿坐して啼く <u>墳上の月、</u>
且须一尽杯中酒。	<u>且つ須らく一たび杯中の酒を盡すべし。</u>
悲来乎、	悲來るか、
悲来乎、	悲來るか。
凤凰不至河无图、	鳳鳥至らず、 <u>河に圖なし、</u>
微子去之箕子奴。	微子は之を去り、 <u>箕子は奴たり。</u>
汉帝不忆李将军	漢帝憶はず李將軍、
楚王放却大夫。	楚王放却す、 <u>屈大夫。</u>
悲来乎、	悲來るか、
悲来乎、	悲來るか。
秦家李斯早追悔、	秦家の李斯、早く追悔、
虚名拨向身之外。	虚名撥して向ふ身の外。
范子何曾爱五湖、	范子何ぞ曾て五湖を愛せむ、

功成名遂身自退 功成り、名遂げ、身自ら退く。
劍は一夫用、 劍は是れ一夫の用、
書能知姓名。 書は能く姓名を知る。

天は長しと雖も、地は久しと雖も、この世に在るものは、常住を望み得ず、金玉堂に満つるも、到底、これを永久に守って居ることは出来ない。人は高高百年の命で、富貴は、何時まであろうか、おまけに死といひ、生といひ、誰でも一度は必ず有るので、生あるものは必ず死ぬるものと、むかしから、ちゃんと決まって居る。見よや、孤猿は、淋しげに墓を照らす月の下に鳴き叫び、いかにも、物すごく、情なき有様で、それにつけても、しばらく、杯中の酒を傾けるが善い（訳注：久保天隨）。この様に、生々流転し、常住を望んでも実現できないこの世の悲しさを歌っている。

第二乐章「孤旅者的秋日」（左側は原詩、右側の日本語訳は宇野功芳氏による）

钱起「效古秋夜长」

秋汉飞玉霜、 秋の霧が湖面を渡り、
北风扫荷香。 霜が草花を白く彩っている。
含情纺织孤灯尽、 恰も工匠が美しい花びらを
拭泪相思寒漏长。 翡翠の粉で凝らしたようだ。
眼前碧云静如水、 花の芳香は流れ去り、
月下凭鸟啼鸟起。 茎は冷たい秋風に揺れている。
谁家少妇事鸳机、 やがて金色に染まった水蓮の葉が
锦幕云屏深掩扉。 湖面に浮かび上がるだろう。
白玉窗中闻落叶、 心は疲れ果て、
应怜寒女独无衣。 小さい灯は幽かな音と共に消えて私はひとり眠りを想う。
おお、甘美な憩いの場所よ、私は今こそお前の許へ行こう。
お前の懐のなかで永遠の安らぎを得るために。
孤独に閉ざされた私の頬は涙に濡れ、心の秋は果てしなく拡がってゆく。
その涙を拭うために、太陽はもはや輝こうとはしないのか。
生は暗く、死もまた暗い！

第三乐章「少年吟」

李白「宴陶家亭子」（左側は原詩、右側の日本語訳は宇野功芳氏による）

曲巷幽人宅、 小さな池の中に、

高門大士家。	白と緑の陶製の四阿が建っている。
池开照胆镜、	硬玉の橋が寅の背のような形で、
林吐破颜花、	四阿に掛かっている。
绿水藏春日、	小さな家の中では友が美しく装ってお喋りをし、
青轩秘晚霞。	ある者は詩を書いている。
若闻弦管妙、	彼等の着物は着崩れて
金谷不能夸。	絹の帽子は襟首におかしくぶらさがっている。

池の静かな水面にはあたりの風景が趣き深く映っている。
その水面に浮かぶ景色は白と緑の四阿と共に形を逆さに映されている。
橋もまた三日月のように水面に浮かび、友は美しく装って酒を酌み、お喋りをしている。

第四乐章「咏美女」

李白「采莲曲」

さいれんきょく11.)

採蓮曲

若耶溪傍采莲女、	<small>じやくやけい</small> 若耶溪傍採蓮の女
笑隔荷花共人语。	笑うて荷花を隔てて、人と共に語る。
日照新妆水底明、	<small>しんさう</small> 日は新装を照らして水底に明かに、
风漂香袂空中拳。	<small>かうべい ひるがへ</small> 風は香袂を飄して空中に擧がる。
岸上谁家游冶郎、	<small>た</small> <small>いう やろう</small> 岸上誰が家の遊冶郎ぞ、
三三五五映垂杨。	<small>すいよう</small> 三三五五、垂楊に映ず。
紫骝嘶入落花去、	<small>しりゆういなな</small> 紫驢嘶いて落花に入つて去る。
见此蜘蛛空断肠。	これを見て、 <small>ちちゆう</small> 踟躕空しく断腸。

蓮の名所として知らるる若耶溪の傍には、若い女がいくらかも集まって、蓮の花を采って居るが、めいめい蓮葉の陰の深い處に居て、花を隔てて話をして居る。折しも、空は晴れて居るから、熙熙たる日は、新装を照らし、その影が、はっきり水に映り、偶ま風が吹いて來ると、女の袂を飄して、空中に擧がって見える（訳注：久保天隨）。若い男女の青春の思いが美しく描写されている。印象派のモネの絵画の描写の様である。

第五乐章「醉翁在春日」（左側に原詩、右側に読み下し文を掲載、読み下し文中、傍線部の詩意は下段に記した。）

李白「春日醉起言志」	<small>12.)</small> 春日醉起して志を言ふ
处世若大梦、	處世、大夢の若し、

胡为劳其生。	<small>なん</small> 胡すれぞ、其生を勞する。
所以终日醉、	終日酔ひ、
頽然卧前楹。	<small>たいぜん</small> <small>ぜんえい</small> <small>ゆえん</small> 頽然として前楹に臥する所以。
觉来兮庭前、	<small>さ</small> <small>かへり</small> 覺め來って、庭前を眇みれば、
一鸟花间鸣。	一鳥、花間に鳴く。
借问此何时、	<small>しやもん</small> 借問す、これ何れの時、
春风语流莺。	春風、 <small>りうあう</small> 流鶯語る。
感之欲叹息、	之に感じて、歎息せむと欲す、
对酒还自倾。	酒に對して、 <small>ま</small> 還た自ら傾く。
浩歌待明月、	<small>かうか</small> 浩歌、明月を待ち、
曲尽已忘情。	曲盡きて、 <small>すで</small> 已に情を忘る。

人のこの世に在るは、あたたか恰も長い夢を見て居る様なものであるから、その間に色々な事をして、性命を勞するのは、まことに馬鹿げて居るので、我は終日酒に酔ひ、やがて潰れて、楹前に臥すのである（訳注：久保天隨）。思い通りにならない人生を、酒の力をかりて慰さめている情景がうたわれている。詩人への共感と同時に、そこはかたない人生の哀愁をさそうのである。

第六乐章「送別」（左側は原詩、右側の日本語訳は宇野功芳氏による）

孟浩然「宿业师山房期丁大不至」

夕阳度西岭、	夕闇は山並みに沈み 冷えびえとした溪谷に 暗い闇がしのび降りてくる。見よ！ 月が蒼い天空に 銀の小舟のように昇ってゆく。そして私は松の暗い木蔭に立って 涼しい夕風をひとり見に受けている。小川のせせらぎが 夕闇に響き渡り、花は夕映えの微光に色を失う。大地は安らぎと 眠りの中に沈んでゆき、その時から、全ての憧れが夢見はじめる。生きることに疲れた人間は 過ぎ去った幸福と青春とを眠りのうちに蘇らそう家路につく。鳥は静かに 木の枝に休んでいる。世界は眠りに落ちたのだ。松の木蔭に冷えびえと風が吹き 私は最後の訣れを 告げるために 木の下で友を待ちわびる。友よ、君が来れば この美しい夕映えを友に愛でよう。君はどこに居るのか？ 私はひとり ここに佇んで 君を待ちわびている。私は琴を手にして 柔らかい草花が波打つ道を、彷徨する。おお美よ！ 永遠の愛と生命とに酔いしれた世界よ！
群壑悠已暝。	
松月生夜凉、	
风泉满清听。	
樵人归欲尽、	
烟鸟栖初定。	
之子期未来、	
狐琴候萝迳。	

王维「送別」送別^{13.)} (左側は原詩、右側に読み下し文を掲載、傍線部の詩意は下段に記した。)

山中相送罢、	<u>山中相い送りて罷み、</u>
日暮掩柴扉。	<u>日暮^{さいひ}柴扉^{おお}を掩う。</u>
春草明年绿、	<u>春草明年緑ならんも、</u>
王孙归不归。	<u>王孫帰るや帰らずや。</u>

山中での見送りをすませ、日暮れ方、柴の戸を閉める。春の草は来年も緑に萌え出ようが、そなたは帰って来るのか、どうか (訳注：一海知義)。人生に別れはつきものであり、帰らぬ人を偲ぶ名詩で、人生の哀感を謳っている。

終章

1908年 (明治41)、上野の東京国立博物館の敷地内に片山東熊 (1855~1917、建築家。明治12年、工部大学校造家学科第一回卒業生。大正4年、宮中顧問官となる。明治19年北京公使館を設計。若き頃、高杉晋作 <1839~1867、幕末の志士> の奇兵隊に入隊。) は、表慶館を設計、開館した。設計にあたった片山東熊は、赤坂離宮 (現、迎賓館)、奈良帝室博物館、京都帝室博物館、桃山御陵も設計し、宮廷建築家と呼ばれている。その業績は西洋建築 (ルネッサンス様式、ネオ・バロック様式など) をわが国に導入し、当時の建築界に衝撃を与えた。この事は、建築・美術デザイン界の東西交流の魁け的な事業として画期的なことであった。異種の文明の接触、融合から、或る新しい成果が生まれることがある。音楽の世界でも例外ではなかった。この年 (1908)、マーラーは、「大地の歌」を完成しているが、この交響曲の底流には、明らかに、西洋音楽と東洋の漢詩という異種文明・文化の融合が見てとれるのであり、且つ、東西文化交流の成果が美事に顕現されているのを理解できよう。

マーラーは、ドイツ語に翻訳された唐詩——李白 (Li Bai, 701~762)、王维 (Wang Wei, 699/701~761)、孟浩然 (Meng Haoran, 689~740)、錢起 (Qian Qi, ca. 722~780) ——に作曲のヒントを得て、交響曲「大地の歌」を創り得た^{14.)}。その為、曲想から立ちのぼるイメージには、東洋的な、中国的な、独特の人生観、死生観が漂っていて、聞く者の心を慰めるのである。マーラーは、唐詩、文学と西洋音楽の形式の融合により、新しい名曲を創り得たといえよう。一方、水墨画家・李庚は、音楽と美術のジャンルの垣根をとりはらい、この「大地の歌」により新しい絵画の世界を創造しえたと言えよう。マーラーが生成した東洋と西洋の文化の融合の成果を、李庚は深思に受けとめ、李庚の心の中で普遍的なるものとして抽象水墨絵画として表現しえた。否、表現せざるを得なかった

のであろう。それは、マーラーの妙なる音楽のリズムと、伸びやかな李庚の毛筆のリズムが期せずして同調し、あのような色彩の抽象水墨画が生成しえたと考えられるのである。この特殊な、創作のリズムは、マーラーと李庚の天才の具有するリズムであり、生命のリズムであり、西洋と東洋を結ぶ精神的な造形のリズムでもあったのである。

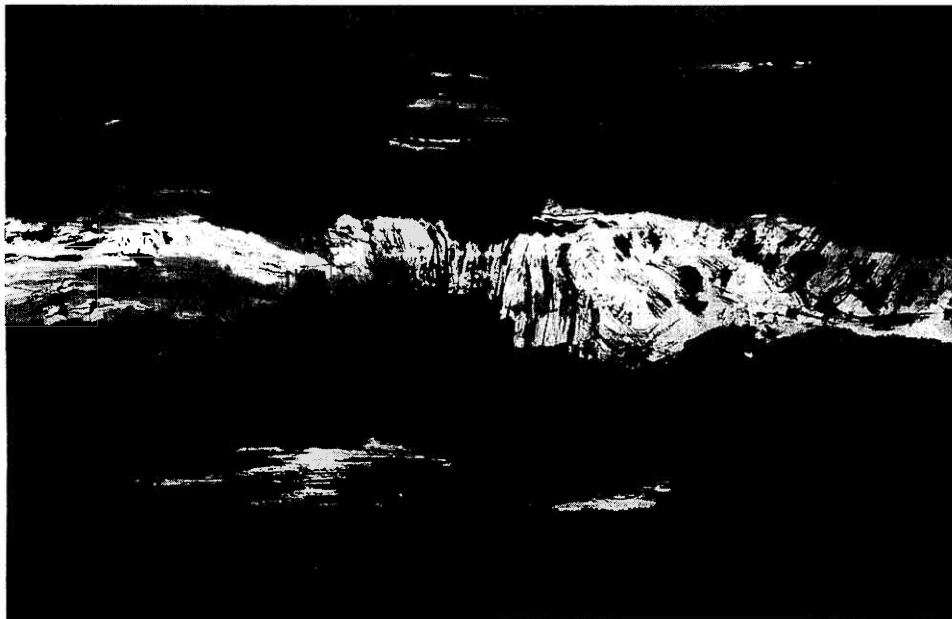
〔図版〕



1 中国美術館（北京市）での「大地之歌」展のタイトル（展示室）の前で、家族と共に。



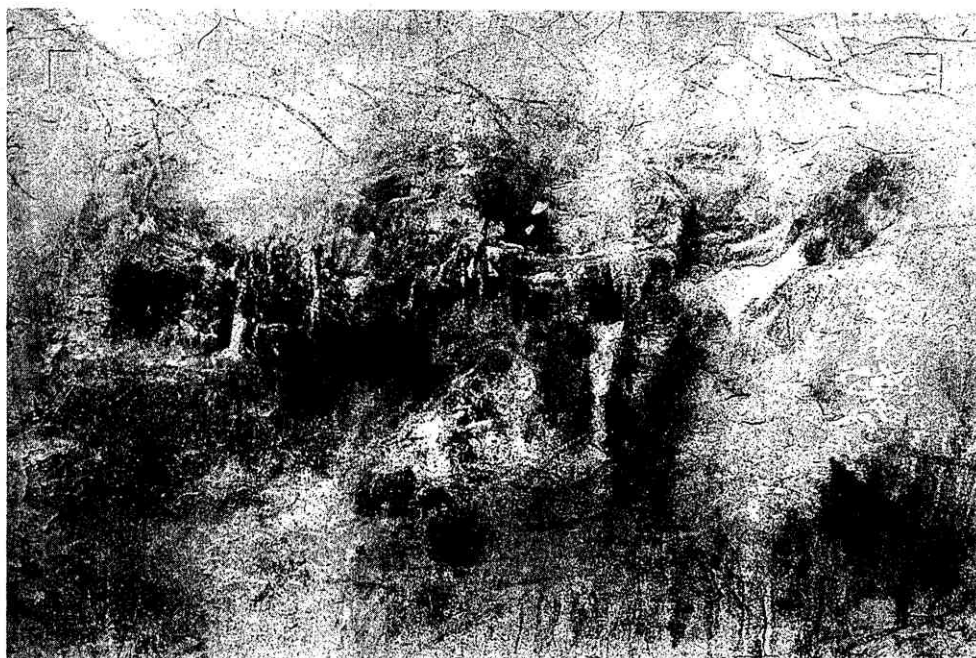
2 中国美術館の看板



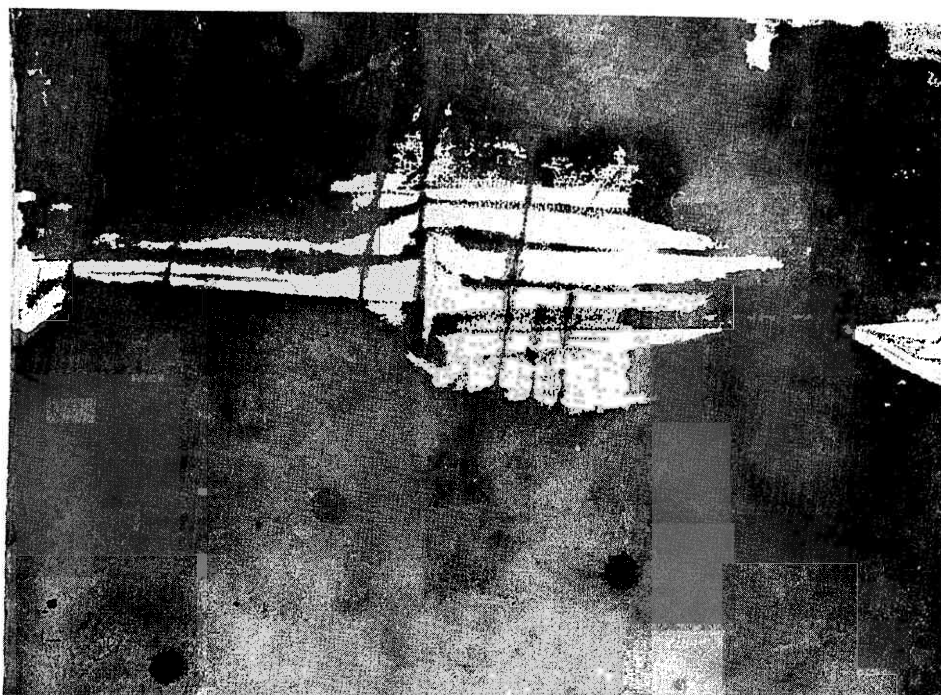
3 大地之歌 第一楽章 (同展のリーフレットの表紙をかざった)



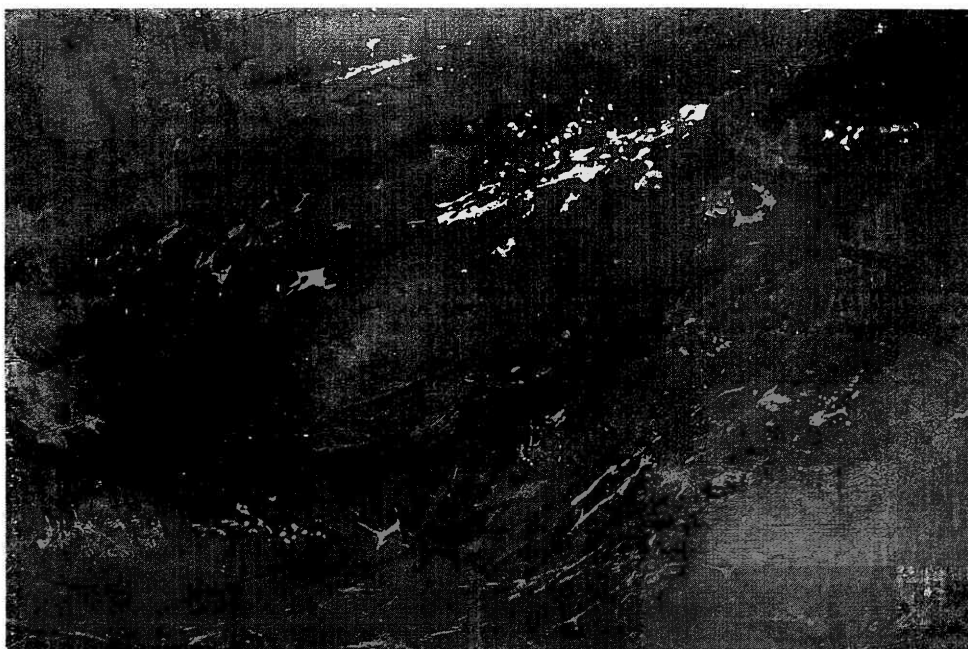
4 大地之歌 第一楽章



5 大地之歌 第三楽章



6 大地之歌 第五楽章



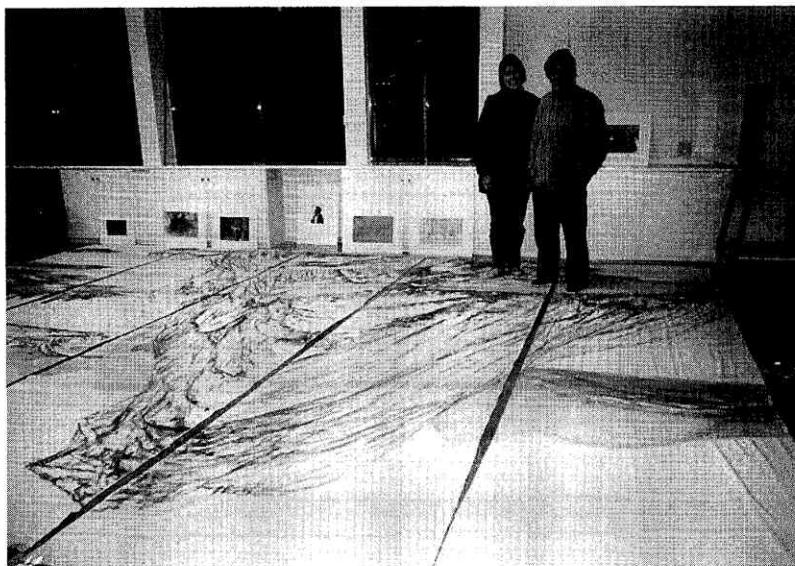
7 大地之歌 第六楽章



8 大地之歌 第六乐章



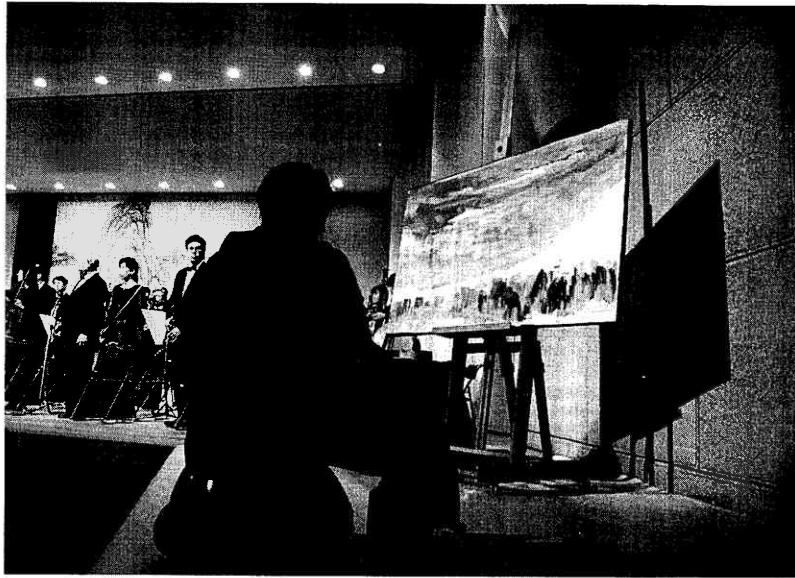
9 中国美術館を背景に知人と共に。



10 制作風景（奥様と共に）



11 「李庚マーラーを描く」西宮交響楽団特別演奏会
（2000.3.12 西宮市民会館アミティホール）の光景。



12 西宮交響楽団特別演奏会での李庚による制作風景（水墨画）。



13 演奏会終了後、挨拶をする李庚と
西宮交響楽団のコンサート・マスター 大上容一氏（大手前大学）。



14 「水墨山水」紙本水墨 1987年



15 「写意山水」紙本設色 1989年

注および参考文献

- 1.) 『大地之歌～李庚 视觉与音响交错的空间』中国北京中国美术馆发行、2000. 3. 28
- 2.) 『李庚水墨画集』陳舜臣監修、李庚著、日本中国美術交流委員会発行、1984. 10. 25
『李庚水墨画展』思文閣ロイヤル画廊発行、1989. 11. 14
『李庚水墨画展～唐朝詩人像と宋人詩意』高島屋美術部発行、1991. 5
- 3.) 『マーラー』(CINEMA SQUARE MAGAZINE NO. 52) KEN RUSSELL 執筆、細川直子訳、「マーラーが私に語るもの」「マーラー略譜」、p. 18～p. 21、シネマスクエアとうきゅう、1987. 6. 12
- 4.) 『名曲鑑賞辞典』中河原理編、「マーラー (グスタフ)」、p. 281～p. 295、東京堂出版、1981. 4. 25
- 5.) 『ラルース世界音楽作品事典』遠山一行・海老沢敏編、p. 497～p. 498、株式会社福武書店、1989. 11. 20
- 6.) 『西東間記』吉川幸次郎著、「マーラー《大地の歌》の原詩について」、p. 209～p. 223、岩波書店、1972. 1. 28
- 7.) 『李庚マーラーを描く～水墨画コンサート～』主催：「大地の歌」コンサート実行委員会・西宮交響楽団・ふれあいの祭典実行委員会、共催：神戸YMCA クロスカルチュラルセンター・(財)西宮市文化振興財団、後援：中国総領事館・日本中国友好協会ほか、マーラー「大地の歌」日本語訳：宇野功芳 (KING RECORDS 『マーラー：交響曲「大地の歌」』より)、西宮交響楽団特別演奏会、西宮市民会館アミティホール、2000. 3. 12
- 8.) 『ラルース世界音楽作品事典』遠山一行・海老沢敏編、p. 496～p. 497、株式会社福武書店、1989. 11. 20
- 9.) 『大地之歌～李庚 视觉与音响交错的空间』中国北京中国美术馆发行、p. 3、2000. 3. 28
- 10.) 『李白全詩集 第一卷 (統国訳漢文大成)』久保天随訳注、「悲歌行」、p. 721～p. 724、日本図書センター、1978. 6. 30。読み下し文のルビについては、難解な読み方の漢字に限った。他の引用部についても同様である。
『漢詩一日一首 春・夏』一海知義著、「将進酒 李白」、p. 36～p. 39、平凡社、1976. 2. 10
『李白 下』(中国詩人選集 第8巻)、武部利男注、p. 46～p. 50、岩波書店、1958. 10. 20
- 11.) 『李白全詩集 第一卷 (統国訳漢文大成)』久保天随訳注、「採蓮曲」、p. 387～p. 389、日本図書センター、1978. 6. 30
『李白 下』(中国詩人選集 第8巻)、武部利男注、p. 79～p. 80、岩波書店、1958. 10. 20
- 12.) 『李白全詩集 第三卷 (統国訳漢文大成)』久保天随訳注、「春日醉起言志」、p. 439～p. 441、日本図書センター、1978. 6. 30
『中国文学歳時記 春〔下)』黒川洋一、入谷仙介、山本和義、横山弘、深澤一幸編集、「春日醉起言志」、p. 20～p. 22、同朋舎出版、1988. 12. 10
- 13.) 『漢詩一日一首 春・夏』一海知義著、「送別 王維」p. 42～p. 43、平凡社、1976. 2. 10
『王維』(中国詩人選集 第8巻)、都留春雄注、p. 170～p. 171、岩波書店、1958. 6. 20
(参考) 送別 送別
下馬飲君酒 馬を下りて君に酒を飲ましむ
問君何所之 君に問う 何の之く所ぞ
君言不得意 君は言う 意を得ず
歸臥南山陲 帰りて南山の陲に臥すと
但去莫復問 但だ去れ 復た問うこと莫かれ
白雲無盡時 白雲は尽くる時 無し

李庚の絵画

馬から下りて、君に別れの酒をすすめる。
君にたずねる、どちらへおいでになりますと。
君は言う、世とあわないので、
帰って南の山のほとりでねそべるのだと。
帰えり給え。二度と何もたずねまい。
南の山には、白い雲の尽きる時がなからうから。

(訳注：都留春雄)

- 14.) 『マーラー～愛と苦悩の回想～』石井宏訳・アルマ・マーラー原作、p. 239～p. 254、音楽之友社、1971. 7. 1
『マーラー人と芸術』村田武雄訳・ブルーノ・ワルター原作、p. 181～p. 215、音楽之友社、1960. 8. 20